

萩吹く歌

室生犀星

青空文庫

あしからじとてこそ人の別れけ
め

何かなにはの浦はすみ

うき

大和物語

寝しんについてもいうことは何時いつもただ一つ、京みやこにのぼり宮みやづかえ仕つかして一身しんを立てなおすことであつた。練ねりいろ色の綾あやうちぎの桂かきを取り出し
ては撫なでさすり畳たたみ返し、そしてまたのべて見たりして、そのさ
きの宮仕の短い日をしのぶも生絹すずしの思おもいはかなんだ日の仕草しぐさであ
つた。桂はまだ匂においをのこしているものの早あその色いろを褪あせかけよ

うとしてゐるほどだった。

今は菟原うばらノ薄すすきお男おとことまで下賤げせんな人のように世間で呼ばれるよう

になつた右馬うまの頭かみとても、そういう生絹のあどけなくも鋭いので

みを見るともう生絹を京にやるよりほかに愛しようとてもなかつた。右馬の頭の機嫌の好い時、食うものにさえ欠けがちに寝につ

いた夜に、お怒りになるようなら申し上げはいたしませんけれど、お怒りにならないようならお話いたしとうございますと低い声こえ

で、月のような顔を擡もたげる時、もう、生絹のいうことが何であるかが大抵わかつていた。眼を凝こらして何時いつかはそれを聞きとどけ

ねばならぬ右馬の頭は、それだけに生絹の去つたあとに生絹のよ
うな女に行き逢うなどとは思ひもかけぬことだった。しかし生絹

をこのまま蓬よもぎう生と蜘蛛くもの巣だらけな穴のような家に、眉すずを煤すすけ
 させて置くのは本心ではなかった。生絹をもつと美しくして見た
 い心と、宮みやづかえ仕まで許すように深くも生絹のからだに心をつか
 っている右馬の頭は、いつも、最後に女としての危険を感じる奥
 のものに打ぶつかり、躊躇ためらわざるをえなかった。こういう愛かなしい時
 に誰の智恵をかりたらいいものだろうか。

右馬うまの頭かみは蘆あしで茸ふく金もいまは持たなかった。たくわえの米こめび
 櫃つにこおろぎが鳴き、生絹すずしはたけの揃いわぬ青菜の枯れ葉をすぐ
 るのに、爪のあいだに泥をそめた。それも厭いとわぬすなおな女だつ
 た。だが、京にのぼるのでみだけは二つの乳ぶさのまんやかに、
 誓ちかいふみ文ふみをはさみ込んでいるように棄てなかつた。右馬の頭も下

じもの役につき、なりわいを建てなおすことではどんなことでも
辞いなまなかつた。釣つりして雑魚ざこをかついでかえつても、なりわいの足
しにはならないからである。風の荒かつた冬のあいだに北側の屋
根ひさしは落ちかかり、壁の穴に零余子むかごの蔓つるはこぞのままの枯れ
葉をつけて、莢えんどう豆さやの莢さやのように干からびて鳴っていた。どちら
にしても生絹とは別れて日に日を重ねて稼がねばならず、じつと
垂れた頭に銭ぜにが鳴って聞えるのであつた。生絹はいうのであつた。
便りのたびになにほどこかのお金はきつとお送りいたします。あな
たさまのご都合よきときに紅梅色の一襲かさねなりとも送りくださいま
せ。いいえ、それより先に薄色のこまやかな襲かさねなりとも、お見立
てしてお便りするはずでございまして、はや、京にのぼる答えと

許しを得たようにいう、思いあがった生絹だった。京の夕ぐれ、
相つれてゆたかに歩くことも夢ではございません。たとえ女房の
つとめ忙しくとも宿下りの日の久かたひさのもの語りも、眼に見える
ようでございませぬ。それに引きかえ、この津つの国の難波なにわのさぶし
さはしのんでも、きようあすの粟あわをさがすのにもほとほと永い間
のことですもの。指のささくれや手のよごれはともあれ、わたく
しの恐ろしいのは若い女としての心が鈍ることでございます。た
とえいまはまだ見られるほどの顔も、心が鈍ってゆけば、曇つて
きたなくなつてしまいます。わたくしそれをあなたさまに申しあ
げて置かねばなりません。女の美しさをすりへらして来るものは
此処ここ津の国の難波の土とほこりでございませぬもの。

右馬の頭はもういうこともなく、點頭うなずいて見せた。このままのなりわいを続けて行つたら、生絹すずしは泥くさい田舎女いなかになり果て和歌の才能すら難波の蓬よもぎょう生うものあいだに埋れてしまわねばならない。右馬の頭は生絹の詠ずる歌をよむときに、彼女の顔の白さがいつも照るように見えた。それほど、右馬の頭は生絹の歌を彼女のからだを飾る花のようなものに愛していた。

「では行くがいい。三年したらわしも立ち直つて迎えに行く。」
「いえ、わたくしの方からお迎えにまいりますわ。」

見違えるように美しくなり、津の国の泥をきれいに落してしまおうと生絹はいい、早、旅の装束をととのえはじめた。右馬の頭も、旅の費用にあてるため銀と金の剣けんをひそかに金にかえようと、

ほど近い町にでかけて行つた。

生絹はその僅かな留守居のあいだにも、何度か聞きき耳みみを立て、何度か往来の道ばたに出て行つた。きゆうに春めいた田や畠は萌もえた青い粉を雑まぜた、襲かさねの色に見えた。僅かな留守居にも斯か様ように待ち遠い思いをしているのに、京に一人でのぼつて行くことが出来ようか、自分の考えはまちがっている、右馬の頭は剣さえ売つて路用にあてようとしているではないか、生絹は柱につかまりも行くまい、難波の土にうもれようと身をもがいてなみだぐんだ。

夜は風の音さえまぜておとずれたが、右馬の頭は遅くなつて町からもどつて来た。何枚かの黄おうごん金にかえた右馬の頭は路用もできたから、七日には立ちたまえ、壺つぼ装束しょうぞくも明日はとどけてく

れるからといったが、生絹は泣いていった。お別れするのはいや、考えちがいして宮仕もするのもしや、みやこにのぼることもいや、あなたのお傍そばにたいたいとうございます。——右馬の頭はさまざまに言葉を分けていったが、生絹はその夜ははなれられぬ氣持を深める一方であつた。

「かくはかなさの身にしみては、いづちもいづちもえ行くまじ。

おん身さま一人ゐ残してあはれいづちもいづちもえ行くまじ。」

おのれ

「己おのれはとてもかくても経へなむ、女のかく若き程に、かくてあるな

むいといとほしき、京にのぼりてよき宮仕をもせよ。よろしきやにもならば、我をもとぶらへ、己も人の如ごともならば、必ず尋ねとぶらはむ。」

右馬の頭は三日つづけて生絹を説き、やっと生絹はもとの望みをもつ女になった。さらに三日のあいだは春あさい田の面をながめながら歩き、三夜は襖もるかぜさえ厭うほど別れを惜しんだ。金のあまりはそのようにして七日のあいだ魚をあぶり酒をあたためるために使われた。

七日過ぎて生絹は立った。壺装束つぼしょうぞくに市女笠いちめがさをかむつた彼女は、細い旅の杖も、右馬の頭が用意していた。心なしか生絹は冴えた美しい顔にやや朝寒むの臙膩えんじをひいた頬をてらして、いきいきとして見えた。

「では行ってまいります。」

彼等は斯様かようにして別れた。

淀よどの川かわ尻じりで舟に乗った生絹は、右に生駒いこまの山、男おとこ山やまを見、
 左ひだりに天王山てんのうざんをのぞんだ。男山おとこやまの麓ふもと、橋本のあたりで舟は桂かつらが
 川わに入つて行つた。前の方に逢坂おうさか、比叡ひえい、左に愛宕あたごや鞍馬くらまを
 のぞんだ生絹は、何年か前にいた京の美しい景色を胸によみがえ
 らせた。

舟は川波にゆられ、客はみな西の京の人らしくこの頃京には笛
 吹くことがはやること、歌の道のこと、商いの品々も高くなつた
 ことなどが話し出された。

「いずれに越されるや。」

同舟の人は故あるような生絹の愁うれい顔を見て、みやこに上る人
 ときめていった。

「物尋ものたずねにまいります。」

と、だけ詳しいことはいわなかった。その男は生絹の顔を占い
見てから、

「御手おてを、……」

と、ひろげた手のひらを眺めてつくづくいうのであった。「みやこにはあなたを待つ人がおられます。あなたの雅みやびたる才がその人を高きに従つかせる。」

「それはどういう意味でございましょうか。わたくしは人を尋ぬるのでございせんけれど、……」

「宮みやづかえ仕つかえなされるのぞみはもう見えております。」

不思議な占いする男は素晴らしい当て、生絹の心を騒がせた。生

絹はべつに答えはしなかつた。かような失礼なことを申すことをお許しあれ。わたしはただ自ら好きで人の運命を見ているにすぎない男ですと彼はふたたびいった。「失礼なようですけれどあなたはいま故ある人と別れて来られたばかりでしょう。それには間違ひはない。……」

ついに生絹は答えぬわけには行かなかつた。

「その方にまた逢うことができましょうか。三年経つても逢うことができましようか。」

「……………」

占う男ははつきりした返事を控えているふうだつた。その顔にはこの男に肖にもやらぬ温かい愁いがあらわれ、生絹はその愁いに

驚いて眼をとどめた。

「ではみやこのたつきのほどをお話しくださいます。」

生絹も右馬の頭とのことをこの男の口から聞きたくはなかつた。聞いて哀れをとめることを恐れた。「みやこにはあなたの幸いが待つております。それでこそ、あなたはすぐれた女として生きられるものが与えられるのです。あなたのえらんだみやこのなりわいには、間違いはもうとうありません。あなたは知らず識^しらずのあいだにあなたの行く方向を手でさぐり当てられておられます。」

「どのようにしてそれがお解りになられます。」

生絹は言い当ててはあとに引かぬこの男の言葉の勁^{つよ}さに、しだいに心が惹かされて行つた。このように勁い言葉を持った男とい

うものを見たことも、生まれてはじめてであった。「それはわしの何といいましようか、かんのようなものです。」

男は先刻さつきとは引きかえ熱心で元気な声でいいついだ。「あなたはすぐれた歌づくりであられる。その上、あなたのおん肌はだもかがやくようになられる。」

生絹は赧あかくなって心持手で顔を蔽おほうようにした。おそらく、生絹の皮膚がみがきようによつて、皓こうこうたる美しさを備えることを見取つていったものであろう。生絹は白檀びやくたんの香のしみる装束を搔かきいだくようにして、占う男の言葉をはずかしく思った。すでに、そういう占う男の言葉によらなくとも、何か氣負うた生絹の眉や眼の奥にも、難波なにわの土の匂いはとうに失うせていた。

かくて占う男とも、別れるときが近づいて行つた。

「何時かまたお会いする時のあることをお約束しましょう。」

男はそういうと立ち上つた。

「いろいろお話していただいてお礼申します。」

丹波口たんばぐちに近いあたりで舟を下り、西の京の町にはいった生絹

は、物商う声、ゆききする人の晴れやかな装束、音という音の雅みや

びたるに眼をみはつた。とうとう、あこがれて此処ここに来たかと生

絹は好意に充ちた眼まなざしであたりを眺めた。とある庭のある構え

の内からよき襲かさねをひからせた物好きな男が一人、銭乞ぜにこうにはあら

ざるふうふうに細い笛を吹いて、生絹の顔をみつめていた。男の顔は

粉のように白かつた。小路こうじの角で、母屋おもやの見える庭では、もう、

梅が枝をはじいて咲いていた。難波ではまだ蕾も固つぼみかったのに、みやこの日の暖かさを思わずにいられなかつた。

その夜は宿の灯の下で、何やら先刻から大切なことを考え忘れていたことに、気づいた。それを思い出そうとしたが、思い出せなかつた。

笛を吹いていた男はまるで女のような顔立ちだつた。そう思いおこしたときに宿の裏庭のそとに、笛は規則正しい孔あなに五本の指がしらを当てていることを知つた。生絹は耳のなかに幾つも絵がひろがつてゆくように、着いたばかりの京の町々をなつかしくも、思い描いた。

「片時もえ忘れじと思ひしに、わたしはまるでいままで右馬の頭

さまのことを一度も思い出さなかつた。「生絹はそんな自分をふしぎに思った。旅の途中から帰つてゆくような思いに迫られたらどうしよう、とさえ、思いわづらうたほどだつた。それなのに、舟から下りてからも唯ただの一度も右馬の頭のことを思い出さなかつたのである。

ひとりしていかにせ
ましと侘わびつれば

そよ

とも前の萩おぎぞこたふ
る

また秋が来たとき生絹は笛吹く人の許もとに殿とのつかえ仕つかしていたが、
 落着いて見れば津の国からの便りもあらず、生絹も雑用に趁おわれ
 て問うこともなかつた。今朝は荻おぎすすき薄うすにそよ風の亘わたるのを見て、
 津の国の秋迫る日をおもい出て、その荻のほとりを去ることがで
 きなかつた。笛吹くあるじの懇ねんごろさはあつたが生絹はそれをしり
 ぞけたことも、一度や二度ではなかつた。生絹はいいかわした人
 のあることを言つてしまつた方がいいと考へていたが、それをそ
 のようにはつきりいえなかつた。笛吹く人は生絹の手入してくれ
 る筈、笛袋にも生絹がいなくてはならぬようになっていた。とり
 分け生絹の歌のしらべは笛吹く人にとって音色に合わせるには、

すぐれた優しさをもっていた。笛吹く人はそういう歌をつくる人と行き逢うことを永い間、この人生でもとめあぐんでいたのである。自分の心と一緒にのしらべを持つ人はどこにも、いままでには見当らなかつた。

生絹は笛の音を簀すの子に出て、膝に手を置いてきき入っていた。吹く人はただ生絹の心をめあてに吹きいつているようで、ほかに、誰も聞いてほしくないふうであつた。ふしぎに生絹は、「ひとりしていかにせましと侘びつればそよとも前の萩ぞこたふる。」の歌のしらべが、笛の音いろにあらわれていて、その人がこのようなしらべに乗せたのであろうかとも思つた。ことに、

ひとりしていかにせましと侘びつれば、……の、静かな吹きは

じまりのひと時は、生絹の心を確しっかりととらえて行つた。津の国を吹く風の音いろが薄すすきの穂がしらをしずかにゆすつては、廻はるかにすぎてゆくような遠い思いであつた。とらえがたいものが物の精神こころになつて見えて来た。

「そんなに君を悲しませるようなら外ほかの曲を吹こう。」

笛吹く人は哀れに啼なきいる生絹のために、笛を唇から放した。

「いえ、その曲をいつまでも聞いていとうございます。」

月明は笛吹く人の友だちのように訪れ、笛の冴さえは道ゆく人の足をとどめるほど、遠いところまでひびいて行つた。津の国にまでこの音いろがとどいたなら、右馬うまの頭かみのところが分るだろうにと思ふくらいだった。

「その人いかなる人にや、仔細あらずば言いも聞かせ。」

笛吹く人はついにこういつて生絹の答えを待った。

「それはただの男の方にすぎません。なりわいさえもできないよ
うな男でございます。」

笛吹くあるじは、笛の艶つやをみがいている生絹の白い頸うなじに眼をと
め、気品ゆたかな女を見入った。実際、生絹はもはや難波なにわの里べ
で見た女とは変つて、おもだち清く品は眉宇びうにあふれて青菜をあ
らうむかしの生絹の姿ではなかつた。

「三とせ経てば逢うえにしを信じているのでございます。」

「使つかして尋ねみたらば、その人のゆくえが分ろう。」

笛吹く人はそんなことでねたみをかける人ではなく、何度も生

絹に右馬の頭のゆくえをたずねるようになのであった。しかし生絹はそれをそうすることは気兼ねして出来ず、ただこう答えるばかりであった。

「そのうちきつと便りがございましょうほどに、お氣にかけくださいますな。」

秋は何度もすぎた。津の国から便りはなく、会う人ごとに尋ねても右馬の頭らしい人を見かけたこともないといい、たずねる術すべもなかった。笛吹く人は家臣を難波に送つてたずねさせたが、これも空しくもどつて来ていった。「さういふ人を聞かず亦また見ざるとのみ、たづねんやうなし。或る下種げしゆの物売りの話にては一年あまり下役につきしよく似し人ありしが、首尾わるく辞してよりゆ

くへ知るべくもなしとのことなり。また或る人のいへらく右馬の頭らしき人の道のべに立ち、をかしき物ならばあきな商ひをしつるを見受けしが、夏去るころ見えずなりけるとのみなり。「家臣はどうてい尋ねるようもないというのであった。生絹の顔はおおざめ、心は沈み、「をかしき物ならば商ひせる」ことを思いでて、ひとりであおい顔をそめてあか赭らむほどであった。そんなことはあるまじ、物売るまでになる人ではない、生絹は恥ずかしさで身をちぢめるような思いだった。

「津の国に行きて見んにあるひはその人に逢はむも計りがたし、人づてのみにて心もとなし。」笛吹く人はそういい、打沈んでいゝる生絹をせき立てた。生絹はその心をどういつて喜んでいいか分

らなかつた。

「わたくし参つてよく尋ねて見ましよう。お許しがございますな
ら。」

「行つて心置きなく尋ねるがいい、路銀の用意も充分にせよ。」
生絹すずしは越えて六日に旅立つて行つた。津の国難波なにわの里は夏がす

ぎもう秋風が白い砂地のうえをひいやりと過ぎて行つた。町はず

れの住んだ家に来て見れば母屋づくりの立派な一棟ひとむねのなかから、
笙吹く音しょうういろがきこえ、訪おとうことすらできなかつた。近くの家々

の人も、網代車あじろぐるまの前まえ簾すだれの中の生絹の顔を見ることがなかつ

た。

「菟原うばらノ薄男すすきおといえる人はいつごろ此処ここから去つたのでしよう

か。」

「菟原ノ薄男は女の人の立つたあと直ぐに行方知れずになりましたよ。見かけた人もありそうに聞いていましたが。」

生絹は以前眺めた田や畠の景色にも、変った身にそわぬものを感じた。しかも、新しい一棟の庭の樹々はいちい一位も松の木も、みな昔のままだった。

生絹は思い出して南の方の田の百姓家をおとずれた。そこは前によく野の菜の物を購あがなった、かくれた一軒家であつたから網代車の簾すだれかき上げて、百姓の女に行き会つた。

「生絹さま、お立派になられました。」

「薄すすきお男はどうしていられるか教えてくださいだされぬか。」

「薄男さまは永い間釣をしてその魚を商うていられましたが、一年余り前から絶えてお姿を見かけたことがございません。」

此処ここでもその行方は知ってはいなかった。

「ゆつくりと町の通りを行くように、通りが、曲ればそのまま曲つて行きや。」生絹は下しもノ者にそういいつけ、簾の間から町々を眺め、南から東に出て北の浦べに出たときには日はもうくれかかっていた。けれども、生絹は町から町へ網あじろぐるま代車を遣やつて、停めることがなかった。「日もくれかかりますゆえお宿とらねばなりません。」と何度もいう下ノ者に、いま暫しばし、いま暫しといい、生絹は昔懐かしい町々を簾のあいから眺めた。衣きぬを商う家、革をひさぐ家、魚をならべる店、わけて薄男すすきおがよく訪れた香こうさばく

家、それらの店にすわる男らの顔にみな見覚えがあつた。小鳥の好きな兵衛ひょうえは明日の朝の餌えを摺するのに片肌ぬいで干鰯えびをしごいていた。

西の浦に出た時に小路から担いきれぬほど蘆あしをかついだ、衣も綻ほころび裸同様の乞食男こじきおとこ一人出て、くれかけた町々に低い声音こえで呼びかけた。

「蘆いの、蘆いの。」

生絹すずしは直覺的にそのききなれた声こゑが、頭のまんなかを通りすぎるのを知つた。その声こゑに忘れぬ覚えがあつた。

「車を停めよ。」

車は停められた。生絹はまだ明るい夕あかりのなかに紛まぎう方も

ない、菟原うばらノ薄男すすきおを見たのであつた。頬は窪み眼くぼはおとろえ、

これが薄男の右馬うまの頭かみとはどう考えても信じられぬほどであつた。

「蘆を買いとらせ、蘆売る男を早う呼び停めよ。」

生絹の声はやや鋭いほど急せき込み、蘆売りはそのときにはもう
小路をまがり、べつの小路にまがろうとする時だつた。

「蘆、蘆をかうぞ。」

呼ばれた蘆売る男は停つた。そして網代車をまぶしそうに見や
つた。それは全く右馬の頭の眼差まなざしにちがいがなかつた。何とい
ひどい変り様であろう。生絹は悪寒おかんを総身におぼえて震えた。

「蘆を見ましよう。もそつと近くによつて下さい。」

男は蘆をならべて見せた。美しい丈のそろつた青い打紐うちひものよ

うな蘆の束が、いくつも、ほぐされた。

「蘆あきな商あきないてから久しくなりますか、蘆はたつきの代しろになりますか

。」

生絹は右馬の頭がむかしの容貌を持っていないことを知った。

「蘆は秋ぐちに売り申すが冬は冬でべつの物を売ります。」

右馬の頭はまだ何も知らぬふうであつた。生絹は多額の金をあ
たえたが、右馬の頭はそれは多すぎるといった。

「いつまでも商あきないする心でいられるのかや。」

男は簾すだれの中の声に不思議そうに小耳かたむけながら、低い声で
いった。

「何もすることがない仕儀でこのような商あきないたしおります。充

分にお笑いください。」

「いえ、笑うことなぞよういたしませぬ。かように美事な蘆はみやこには一本も見られません。」

「みやこから参られた？」

「みやこから人を尋ねてまいりましたが、その人のお姿はなくかように日ぐれに及んだのでございます。」

「人を尋ねてと仰せられるか。……」

右馬の頭は再び簾の中の女の顔を見ようとしたが、綾のようにすかすと見紛う簾ではよくは見えないもどかしさがあつた。

「何処どこの何という人か、あるいは存じているかも分りませぬ。」

「もと右馬の頭をしていた方でございます。」

その男の顔がさつと変つたとき、
 前まえすだれ簾のすき間から月のよ
 うに匂う生絹の顔をちらと見入つた。生絹もその時不幸な一瞥いちべつ
 を合わせたのであつた。だが右馬の頭は物もいわずに恥はずかしさ
 のためか、蘆の荷をとり乱したまま馳はり出した。生絹はもうちよ
 つとのことで車から出てあとを趁おうところであつた。

「お懐かしゅうございます右馬の頭さま、どのようにお逢あひした
 く永い間思おもいわずうていたことでしょう。」

生絹は逃げかくれて馳はるうしろ姿を見つめた。その心はどこか
 に冷たさのある、しかも人と人の苦しみのうえに乗のつていよう
 な気持だつた。逃げかくれる気持も分るが、それをいま一度趁おう
 ようになるのも拒さげられぬ女の心だつた。

「蘆売る人をさがせよ。かならず捜し出して下され。」

生絹の声は殆ど禱いのるように震えをおび、静かにしていられぬふう
に車から降り立った。砂白く暮ぼしよく色は濃い藍あゐをかさねた往来の
うえに、いまは生絹みずからの顔すら町の人に見分けられぬふう
であつた。生絹は一本の蘆を手にとりそのまつすぐに伸びた美
しきに見とれながらふたたび右馬の頭さま、わたくしたちはなん
という不幸な時ばかりを選んで、そういう日にばかり逢わねばな
らぬのでしようと囁ささやくようにいつた。わたくしたちは逢えば逢う
で悲しく、逢わざれば逢わざるが故に悲しいとしたらわたくした
ちは一体どういう方向にむいて生きてゆくことになるのでしよう。
わたくしはそれを教える人に教わりたい、どこにそれを教える人

がいたのでしよう。生絹がこんな思いに乱れているあいだに下ノ者が慌あわてて来て、済まぬふうにいった。何処どこをさがしても見当りませぬ。町々を見分けましたが見附かりませぬ。

「わたくしだけの命令ではなく、みやこの殿のおいつけをも忘れぬよう。早うさがせよ。」

生絹すずしの声は懸命な厳格さをおびて、いつになく下ノ者に烈しく答えた。わたくしは何のためにここに訪れて来たのであろう。みやこの平安さをなぜにここに来てこわそうとするのであろう、しかも右馬の頭さまの心をふたたび取り乱そうとわたくしはその糸ぐちをいま解きかかっているのではないか。見なくともいい零落のお姿を見ようとし捜さなくともいいのにお隠れになるのを趁お

つめようとすると、そういう高飛車なおごった気持にわたくしは何時いなり変つたのであろうか。生絹はいまにも下ノ者にもはや蘆売る人を捜さなくともいいという命い令いを下そうかと、何度も思い惑うているところであつた。下ノ者は馳り来て伝えていった。

「蘆売る男は見つかりましたが同行はいたしません。」

生絹はまぶしいような顔附をした。

右馬うまの頭かみの菟原うばらノ薄すすきお男おとこはとある町うらの人の住まない廃家の、はや虫のすだいでいる冷たい竈かまどのうしろに屈こまって、匿かくれて坐つていた。そしてどのようなように言い聞かせてもそこから出ようとはしなかつた。

「そのようにいうならば我に紙すずりと硯すずりとをあたえね。」

やつとそういうだけであつた。供の者はたとうがみ 畳紙たとうがみに硯をそえて
 持つて行き、右馬の頭の前に置いた。右馬の頭は、端然と硯に墨
 をあてがい、筆先を柔らげると重い筆さばきで書きながしたが、
 思い返していま一度書きあらためた。下ノ者はこの乞食男がかよう斯様
 に美事な筆さばきをしたのを見て、主のしゆむかしの縁ある人も尊き
 宮人にちがいがなかつたであろうと、改まつたていちよう鄭重ていちようさで、畳紙
 をおしいただいていった。

「恐れ入りました。ごさいます。」

右馬の頭はもう一度よみあらためた。

君なくてあしかりけりと思ふにも

いとど難波の浦ぞすみうき

これを封じて、

「み車に奉れ。」と悲しげに右馬の頭は再び竈のうしろにかがみ込んだ。あたりは人を見分けることのできないほど、蝙蝠こうもり色の夜のいろがかさなつて行つた。

生絹は畳紙をひろげて久方振りて右馬の頭の文字を見入つたが、筆の勢いや品、匂いすらもむかしのままに残つてゐることを、いたくも心嬉うれしく思つた。

「君なくてあしかりけると思ふにも、……」と読み下し、「君なくてあしかりける……」とまた繰返し詠よみ、そうであつたか、そ

うであらざらんにはわが心もかく騒ぐまじきにと、生絹は涙せきとめることができなかつた。難波なにわの浦に来てよかつた。逢えたではないかと今やつと逢えた嬉しさを感じた。

「わたくしをそこに案内して下され。」

しも下ノ者の連れてはいつた廃家は、むかし住んだ家のように在あ

もの悉く荒れはてていた。例の竈の裏の薪たきぎや藁わらをつんだあたりに

も、戸の裏、古材のかけにも、もう、右馬の頭の姿はなかつた。

此処ここならば今こんじやく昔の思いに逢い語らうこともできたのに、心も

知らずに去つて行つたことが悲しく身に応え、生絹はなつかしげに闇のあいだに眼を永くとどめた。闇というものがこんなに美しいものであることを生絹は、はじめて知つた。右馬の頭さま、と

彼女はしずかに呼びつづけた。しかし答えはなく、その人は遠くに走つてもう姿はなかつた。

あくるひ翌日、四年前と同じように、淀の川尻から舟に乗つたが、ふ

しぎに生絹すずしにうやうやしく一いっしゅう揖ゆうをするものがあつた。占うこ

とを自分の好きでやる、例の愁いのある額をしている男であつた。

彼は生絹のつれた供の者を見て言葉をかけていいやら悪いやら控えていふうであつた。生絹はきようこの男に再度も邂逅かいこうすること

で何やら宿縁に似たものを感じたが、身分のちがいが自然に

生絹にあつたものか、生絹はだまって遠い生駒いこまの山なみを見てい

た。

しばらくの
暫くの後、彼の男はあらためて生絹の前に挨拶に来て、うやうやしく手をついたままいった。

「秋の難波ななわはいかがでござりました。お一人にてお帰りなされた御様子のように拝します。」

「その節はお言葉添えを忝かたじけういたしました。お変りものう。」
生絹はやつと挨拶をしたが、きようの占う男の顔色は特にはれやかなものであった。生絹はそれが自分を占うていて顔色にあらわれたものと見るより外はなかつた。

「しかしよくお尋ねなされました。お心のほどは誰たれびと人も銘じて忘れることはござりますまい。難波のことは難波のこと、お身様みさまは永くお仕合わせあるように。」

生絹はあらためて教えを乞うごとき眼差しの弱りを見せていった。

「わたくしはもう京をはなれることがございませんが、それでいいのでしょうか。わたくしの貴方あなたにお聞き申したいことはただ一つそのことでございます。」

「それでこそお身様の落着き先が、おわかりになったと申すものです。きっとそれはお別れになった方の願いでもございましたらう。」

彼はそういうと再び席を元の処ところに変わって行つた。占う人の額は依然はれやかなものだつた。舟は荻おぎと蘆あしのしげる岸近くすれすれに行き、生絹は白い手を蘆のひと本もとにふれて例の低い声で右馬の

頭さま、ではおわかれ申しますと胸の中で悲しげに繰り返してさ
さやいて行つた。

青空文庫情報

底本：「犀星王朝小品集」岩波文庫、岩波書店

1984（昭和59）年3月16日第1刷発行

2001（平成13）年1月16日第6刷発行

底本の親本：「室生犀星全王朝物語 上」作品社

1982（昭和57）年5月発行

初出：「婦人之友」

1940（昭和15）年11月号

※表題は底本では、「萩《おぎ》吹く歌」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

萩吹く歌

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>